4. 平城宮跡・京跡出土の木簡

1983年度の調査では，平城宮跡の2個所と平城京跡の4個所の調査区から総計2,117点の木簡が出土した。主な木簡の釈文は既に『平城宮発掘調査出土木簡概報⑰』(1984年6月刊)に報告したので，ここでは内容的に興味深いものを中心に紹介する。

	調査地区	次数	出土遺構	点数（削屑）
平城宮	推定第一次東朝集殿	150	SD3765	33 (33)
	第二次大極殿院・内裏東方官衙	154	SD2700	1,894(1206)
			SD3410	70 (42)
			SD4240	70 (40)
			SD11600	8
			SX11504	15 (10)
平城京	九条大路	125補足(2)	九条大路北側溝等	4
	右京八条一坊十一坪	149	西一坊坊間大路西側溝	18
	左京四条二坊一坪	151-1	八角形井戸	1
	左京二条二坊十三坪	151-11	十二・十三坪坪境小路東側溝等	4
計				2,117(1331)

1983年度出土木簡点数

推定第一次東朝集殿地区（第150次調査）出土木簡　調査区は平城宮推定第一次朝堂院地区南方で，1982年度の第146次調査区に南接する。平城宮造営時に開鑿され宮中央部を南流する基幹排水溝SD3765（幅1.0m，深さ0.3m）の三層に分かれる堆積層の下層から木簡の削屑33点が出土した。「□少志佐伯」「□一人□使一人」と墨書の残るもの以外は墨点のみのものが多い。

第二次大極殿院・内裏東方官衙地区（第154次調査）出土木簡　調査区は第二次大極殿院・内裏外郭東方で，1967年度の第40次調査区に南接する。木簡は，内裏外郭の東側を南流する一部石組の南北溝SD2700（「東大溝」，幅6.0m，深さ1.4m）から1894点，内裏からSD2700に合流する素掘りの東西溝SD4240（幅6.0m，深さ2.2m）から70点，調査区南端で確認した官衙からSD2700に排水するための木樋暗渠SX11504から15点，宮の南北排水溝の一つで調査区東南隅で検出した一部石組の南北溝SD3410（幅4.5m，深さ1.0m）から70点，SD3410の北端に接続して東へ延びる素掘りの東西溝SD11600（幅5.8m，深さ1.0m）から8点，計2,057点が出土した。

SD2700は宮東部の基幹排水溝で既に第21・129・139次の各調査でも多数の木簡が出土している。今回の調査では，SD4240がSD2700と合流する地点，SD2700に架かる橋SX11505付近を中心に木簡が出土した。年紀を有する木簡は21点あり，堆積層の底から2層目より天平2～4（730～732）年，3層目より天平5～天平勝宝3（733～751）年，4層目より天平5～天平神護3（733～767）年，5・6層目からは延暦2～3（783～784）年の木簡が出土し，更に最上層からは隆平永宝（796年初鋳）とともに9世紀前半代の土器が出土した。従来の知見と同様にSD2700が奈良時代を通じて順次埋没していった状況が確認された。SD2700と同様の堆積状況を示すSD4240の4層目からも天平17年の紀年銘木簡が出土した。また，SD3410とSD11600は同じ堆積状況で上下二層に分かれるが，SD3410の下層からは天平16年，SD11600の下層からも宝亀7（776）年の紀年銘木簡が出土している。以下，SD2700出土の木簡を中心に文書・荷札・付札・その他の順にみていくことにする。

文書木簡にみえる官司・官職には天皇と深く関わる中務省（中宮職・図書寮・縫殿寮・陰陽寮・

侍従・内舎人・少監物・大舎人）・宮内省（大膳職・大炊寮・主殿寮・典薬寮・内膳司）・勅旨省・中衛府（少将・将監）・左兵衛府・内兵庫が多くを占め，その中にはＳＤ4240から流れ込んだものもあると思われ，この地域の性格を考える上で注目される。また，泉内親王（天智天皇皇女，伊勢斎宮，天平６年２月薨）の宮の物品出納に関するもの，坂合部女王（光仁天皇異母姉，宝亀９年５月薨，なお史料には宝亀５年11月以降内親王として現れる）の資人を申送したことを記すもの（６），宿直や留守の官人名を列記したもの（３，４）も出土した。造営工事に於ける丁匠の国毎の人数とその総計を書き上げた木簡６点の内には，工・匠丁の別を明記したものもあり（９，10），造営工事に於ける労働編成の一端をうかがわせる。これらの木簡は出土層位から２つのグループに大別でき（２層目と４層目），少くとも時期を異にする二回の造営に関わると考えられる。律令国家の浮浪人対策の実行を示す木簡も出土した（１）。頻々変更があった中で浮浪人を本貫へ逓送した時期は２回あるが，出土層位（３層目）から養老５（721）年４月～天平８年２月の期間のものとみられる。その他，返抄（５）や官人の上日数を記録した多数の削屑も出土している。

貢進物荷札には伊豆国の調荷札７点がある（７，８）。伊豆国調荷札の場合，調の品目の判明するものは全て荒堅魚である。堅魚を調として貢ずる国は他にもあるが（延喜主計上式），荒堅魚を進めるのは伊豆国だけで，特産品とみられる。伊豆国調荷札には細長い材（完形品では長さは１尺を超え幅は約１寸）の上下両端に切り込みを入れた例が多い。今回出土した木簡は，天平５年のものが５点とまとまっており，出土地点がＳＤ2700東岸に限られ，出土層位も４層目に集中しているので，ＳＤ2700の東方から一括投棄された可能性がある。

付札には東市での交易に用いられた銭の付札がある（２）。京職等で必要とする物品を西市司が市で購入したことを示す木簡がかつて宮内から出土しており（『平城宮木簡』１―487～489，『平城京西市跡』），このことを示す文書も正倉院文書の中に残っている。今回出土した付札はこれらと異なり，市司を介さずに東市で直接に交易したことを示すかとも思われる。また，東市を構成する廛名が知られ，さらにそれを営む市人の具体的な名前のわかる点も興味深い。

その他には題籤６点が出土した。近江国の大豆の出納に関するもの(11)は令制下の中央に於ける大豆の出納・保管の実態を知る上で注目される。

平城京跡出土木簡　九条大路の調査では，九条大路北側溝（幅2.5m，深さ0.9m）から「勝寶二年九月□」とある紀年銘木簡１点，平城京造営時の土壙から鯰の付札(12)３点が出土。右京八条一坊十一坪の調査では，奈良時代後半期の西一坊坊間大路西側溝（幅5.5m～11.0m，深さ1.75m）から，18点の木簡が多数の祭祀関係遺物，鋳造関係遺物，銅銭，多数の墨書土器等とともに出土した。左京四条二坊一坪の調査では，木枠外面に墨書のある八角形井戸（天平末年に掘鑿）を検出した。左京二条二坊十三坪の調査では，十二・十三坪坪境小路東側溝（幅3.0m，深さ0.7m）から，鎰の授受に関する文書木簡と，志摩国英虞郡の船越郷から貢進された海松に付けた保管・整理の為の物品付札(13)等３点，中世の土取りの際その土取り穴に混入したと思われる伊豆国賀茂郡某郷の荷札１点が出土した。（橋本義則）

第一五四次

*(1) □人遞送事合浮浪人□□　(152)×(17)×4　6081

*(2)・東□〔市カ〕交易銭計壓人服部　(94)×16×3　6039
・真吉

*(3)・西直人六人 久米石濱 刑部大万呂 長谷部小枚 □部尓山□
・大生乙万呂 若倭東人　五月四日　267×37×4　6011

(4)・留守内竪八人 穴太公万呂 内蔵豊守 若湯坐朝□ 川原豊□
・□□□　(198)×22×3　6081

*(5)・□□□未 右物依員欲納以付但馬荷又加法 自今以後法勘荷數可進上又付便 猶并付薗等可進上又東薗努
・□□過時故返抄
四月十一日
□□廣海連福成　(266)×48×3　6019

(6) 大庭縣万呂河内国丹比郡人　坂合部女王資人申送已

*(7) 伊豆國那賀郡射鷲郷和太里丈部黒栖調荒堅魚十一斤十両七連八節
天平五年九月　381×28×3　6011

(8) 伊豆國賀茂郡賀茂郷□□里戸主生部犬麻呂□生部千麻呂調荒堅魚十一斤十両 六連二九 天平五年十月　359×35×5　6011

*(9) 美濃工一　下総廿四人
上総三　備後三　播磨二　卅人 斐太廿 匠丁廿　191×45×3　6011

*(10)・斐太工卅　相模工一　下野□
美濃工九　上野仕十五　(110)×32×3　6019

*(11)・□民部収
納近江大豆出
・出張
天平十八年　(152)×21×3　6061

第一二五次補足(2)

(12)・廣萬侶鯰百連甲
・□〔廣カ〕萬侶鯰百連甲　151×21×8　6032

第一五一―一一次

(13) 舟越海松一古　116×15×4　6051

(*印を付したものは口絵写真所掲)